
非日常的な日常

ジンプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常的な日常

【Nコード】

N1110D

【作者名】

ジンプ

【あらすじ】

クールなイケメン。でもギャル語！かわいい女子高生。でもダンディ！別に入れ替わったわけではないのにどこかが違う二人の日常。アイドル・ツンデレ・お姉さん！メイドにお嬢に王子様、ドジっ娘・おかまに眼鏡っ娘・・・なんでもこいやあ！ばっちしOK！バトルを混ぜて、天使を加えて、ラテン語トッピングしたらあつという間に非日常の出来上がり！え？それすら日常？・・・ご賞味あれ？

ブローグ『Ab ovo usque ad mala』(最初から最後まで)

えー呪文書の一節です。

今はあまり関係はありませんが・・・？

〳〵世界呪文書第99章二項〳〵

「・・・もし、世界の記憶を知ったのならば

それは数多の神々の気まぐれ。

もし、世界の時間を触ったのならば

それはこの地に巢食う人々の欲望。

もし、その二つを感じたのなら・・・？

それは支配者たる者の契り。
英雄たる者の定め。

よいか、我が不肖の後継者よ

感じることは見極めること。

見極めることは、戦うこと。

戦うことは、生き抜くこと。

生に執着し、生を刻み、生に捧げよ。

己を律し、世界を愛し、前だけ見続けよ……。

つかむな、受け止めよ。相手を知り、己と対話し、存在をつかめ。

おまえはこの世界の主たるものを、倒さねばならぬ。

その時のその場にいるその志が、世界の道を決定するのだ。

この空に誓おう。この大地に祈ろう。この海に請おう。

探すのではない、見つけるのではない、そこにあるのだ。

それがおまえ自身となり、繋がりを色鮮やかに奏でる。

それが全てだ。」

どうだい？

実に美しく、簡単だろう？

ブローグ『Ab ovo usque ad mala』（最初から最後まで

えゝ今回はそこまでコメディ！というわけではございませんでしたが、大丈夫。ヤツが暴れますから！そう、ミスターギャップのあの男が！

第一日『Alea iacta est!』(賽は投げられた) (前書き)

ここからがはじまりです。

そこまで暴れません・・・。

第一日『Al e a i a c t a e s t ! (賽は投げられた)』

A M 5 : 0 0 麗京市 中央区 センターズビル 4 0 0 1 号室

その部屋の住人が迎える朝の風景は、いつもと変わらない。

習慣の早寝早起きをし、洋モクに火を点け起きぬけの一服をゆつくりと楽しむ。

その後は熱いシャワーを浴び、髪を乾かしながら湯を沸かす。

パンをトースターのなかに入れ、フライパンを熱しベーコンエッグを作る。

レタスを千切りトマトを添えレモンを振り掛け、沸いたお湯をゆつくりとドリップに注ぎ込む。

手際よく盛り付けたら・・・

サラダとトースト、ベーコンエッグにホットコーヒー。朝食の完成だ。

「・・・いただきます」

きちんと手を合わせ挨拶。洋食で統一された朝食を黙々と胃に入れていく。

最後の一切れを口に放り込み丁寧に飲み込む。

「我ながら、なかなかおいしかった。ごちそうさま」

やっぱり手を合わせ、挨拶。少し冷めたコーヒーに手を伸ばす。

食後のコーヒーにはこだわりがある・・・なんせ自分で豆から挽いてブレンドした逸品だ。

「ふう、今回はうまくいたな」

時計を確認・・・まだ時間は十分だ。

制服に着替え髪を梳かし洗い物と洗濯を済ませたら、また洋モクに火を点ける。

たっぷりと煙を肺に溜め、一気に吐きだし余韻に浸る。

この少し鼻にさわる甘ったるい香りは、洋モク特有のもので気に入っている。

そうこうしているうちに時間だ。

ここからバス停まで5分弱。ほふく前進でいっても間に合うくらいの余裕を持って出るのが、いつもの流れだ。

「いつてくる」

・・・誰もいないが、一応挨拶。寂しさが少し残るが・・・しつかりと戸締りし、マンションを出る。

そと外見とは不釣り合いな高級マンションの最上階に住んでいるのだが、自分の金で買ったのだ。文句は言わせない。

朝の冷たい風を楽しみながら、ゆっくりと歩く。よく晴れた早朝が一番好きだ。

バス停が見えてきた。まだ誰もいない。いつものことだがな……。

それから何分経ったか……。少しずつ人が集まりだした。

あと二、三分すればバスも来る。また変わり栄えのない日常が始まる。

（タッタッタッタッタ……）

「あ、あぶなかったあ……！」

ハアハア言いながら走ってきた誰かが隣に並ぶ。

よっぽど急いでいたのだろう。相当息が切れている。

チラリと見ると……。意外にも目が覚めるような美青年だった。

銀色の長い髪をポニーテールにした、小顔で長身の足が長いモデル体系。目はキリリと鋭く、とがった顎。線の真っ直ぐな高めの鼻にかかった淵なしのおしゃれな眼鏡。服装もスーツに黒いロングコートを羽織った姿なのだが、決してホストのようには見えず、爽やかさと上品さを醸し出している。体中から普通のイケメンではございませんよという雰囲気が出てる……。が、正直そこまで興味はない。また前に向き直る。

と、胸の刺青が少し疼いた・・・のだが、気のせいかな？

後ろの女子大生達のはしゃぐ声が聞こえてくる。本人達は小声のつもりだろうが、実に筒抜けだ。

「ねえねえあのカレめちやカッコよくない??」

「マジヤバイっしょ? あたしモロタイプだし!」

・・・やっぱりこれが普通のオンナノコの反応なんだろうな。

そのまま少しざわめいた後、イケメン・・・いや、クールガイだな。の息が整ってきた。

ニコツと上品な笑顔をしながら・・・

バスを待っているのだろう(結局横目でチラ見する)

♪♪♪♪♪♪♪♪

と、突然いまどきなオンナノコの着ウタが大音量で流れる。マナーモードくらいしとけよ!と思うず言ってしまいそうになったがぐっところえる。・・・たく、誰だ? 後ろの女子大生達か?

「あ! 浜崎ナナの新曲じゃない?」

「うつそ〜! だれだれ?」

どうやら女子大生達ではなさそうだ。まわりの人達も音源を捜す。

・・・となりのクールガイがこそごとバックを漁りだした。え？
お、おまえ？

「あれ？どこにいったのかな・・・つとあつたあつた♪はぁい？
もしもし？」

！！

あまりのことに目を見開く。おいおいおい、となりのクールガイよ！
なんだその・・・ビーズでうめつくされ、なおかつ馬鹿でかいストラップがびっしり付いた無駄にド派手な真っ赤の携帯は！それにその電話のでかたつて・・・。

「うん。わかってるよぉ（^^）ちゃん待機してるからさ♪
うん。うん・・・はぁい♪バイバーイ！」

クールガイは外見によく合う透き通った、耳にすんなり入ってくる少し低めの上品な声とはまったく合っていないギヤル全開の喋り方で一通り話すと、能天気な笑いながら電話を切った。

イメージ丸つぶれ。ギャップとかそういうレベルを逸脱している。

周りは少しの間啞然とし、その後一気にその青年から距離を置く。

まあ私は興味がないのでそのままだが（頑固）。

少し重い感じの空気が流れる。居心地悪いな。

・・・ふいに空気をまったく読まない能天気な声で、クールガイが尋ねる。

「ねえ、バスまだ来てないよね？」

・・・とりあえず自分じゃないだろうから無視する。

「ちよつとシカトは傷つくつスよあ・・・その髪の毛の長い超美人」
kさん！」

美人JK・・・ワタシのことか？

「ワタシのことか？」

とりあえず尋ねてみる。

「質問に質問で返すのは、すんごく失礼だよ？」

いちいちイライラさせる男だな・・・。

「ああ、そうだな。で？ワタシになにか？」

「だあかあらあ！バスはもう来たのか？って訊いてるの！」

おまえにイライラされる筋合いはないのだが・・・

「その答えなら、『いいえ』だ。まだバスは来ていない。」

「よかったあゝ」間に合っちゃったよ！」

と、クールガイ・・・いや能天気男はいきなりホツとした顔で後ろの人達からは見えないように、胸ポケットからある【札】を取り出した。

あれは・・・確か・・・

「我が御名において願う。札より力を導きたまええ！んつとお『開』！」

体の隅々まで響きそうな低音で、札開式のディスプレイを唱える。時々ギョル語で。

とたんに札から光が溢れ・・・っやはり最高ランクの人避けの術札

【絶壁の式】か。

それをあんなに簡単に使うとは。さっきの刺青の疼きは偶然じゃなかったんだな。ってそれよりいきなりなんという術符使っているんだ！

後ろに居た人たちは符式の効果で全員どこかへ行ってしまった。

「おお！大成功！・・・って！なんであなたがここにいるの！？またミスッた？ヤベエゝなあ」

ワタシのほうを見て驚きの顔をする。感情表現の豊かな顔だな。

「いや、私には符式は効果がない。」

このペンダントおかげでな……とは言わないが。とりあえず答えしておく。

「え？ドゥーして？」

キョトンとした顔で尋ねる能天気男。

「たぶんおまえと同じ、退魔で生計を立てておるからだろうな。」

「は？ただの美人JK（女子高生）じゃないん？」

「副業でやっておるのだ」

退魔稼業をしているものは、そのほとんどが副業で行っている場合が多い。

たしかに一回の金はいいが、どうしてもそれなりの危険が伴うのだ。毎日やっていたんじゃない体がいくつあっても足りない。

「へえーその歳で！意外に世間は狭いっすネエー。名前は？なんて言うんスか？」

「【南上院 恋華】。一族で退魔を生業としてきた。」

こう見えても、その道では相当有名だと自負している。

「ああね！道理で……で？それってスゴイんすか？」

・・・。

「召喚士南上院を知らぬのか？」

「え？なんで？」

イラッ！も、もういい・・・。

それよりもっと大きな疑問がある。

「そ、それにしても・・・なぜそんな大層な符式をつかったのだ？」

普通はここまで大規模な物は使わない。【絶壁の式】といったら指定された範囲内には完全無欠に入っ子一人入れなくなる（みんなほかの用事を思い出して遠回りしたりする羽目になる・・・）ほどの符式だったはずだ。

そのせいで今都心のだ真ん中なのに誰もいないゴーストタウンと化している。まあ大方予想はつくが・・・。

「ああそれはね？・・・と、来ちゃったようですね。」

そういつて、おもむろに一点を指差す。

見ればバスが来てるだけだが・・・なるほど、【絶壁の式】の影響下では何人たりとも、それがバスであろうと何であろうと、霊体以外はゼツタイに入ってこないはずなのだ。

「なるほどな。あいつがターゲット・・・というわけか。」

「ん。そおなんすよお、昨日依頼があつてねえ？」

確かにいつものバスとは雰囲気が全く違う。それにこの気の濃度に匂い立つ陰の気配。

「悪魔・・・しかも爵位クラスのか？」

「うん。しかも厄介なことに【バロン】を名乗ってんのよぉ、たまんないっしょ？手に負えるわきゃねっつの！！」

【バロン（男爵）】とは、大罪の次に力をもつ悪魔のことだが・・・。

と、バスが形を変え始める。だんだんと人形に近づき・・・半人半バスの奇妙な形で止まった。

いびつに突き出た黄色の目でこちらを睨む。どうやらワタシも敵と認識されたようだ。

「そついえば・・・名を聞いていなかったな。なんと言つ？」

バックから拳銃ほどの大きさをした【リリース】を取り出しながら尋ねる。

「ん、【零^{レイシ}司】20歳でえす」

あれほどの力でワタシがまったく知らないということは・・・、成り立ての新米なのだろう。

巻き込まれてしまった物はほっとけない。さつさと終わらせるに限

る。

「行くぞ」

「どこに？」

イラッ

「一緒に戦ってくれるんすか？心強いな」

【リリース】を能天気になつ零司のこめかみに向ける……。

「とりあえず、な。ギャラは貰うぞ」

そう言いながら洋モクに火を付ける。

立ち上る煙が昇りかけた太陽と交錯し……戦いの緊張を高める。

「グフッ」

零司は煙にむせた。

「……。」

「ゴホッ！ガハッ！ああー副流煙があ！体を蝕む猛毒があ！」

「うるさいっ！変な雰囲気になるだろうが！」

「やいやいや！自分未成年じゃないんすか？なあくに法に真っ向からけんか売るような行為しちゃってるんですかあ？」

「気にするな。以上。」

「いや、それ……《ヴヴヴヴヴァアアア！》おわっ！忘れてた！」

「とりあえず行くぞ！」

悪魔を睨みながら間合いを取り、

【リリース】のリボルバーを廻しながら告げる。

「Iurare in verba magistri.（己の言葉で誓え）」

「ラテン語？かつくいい」

「いちいち反応するな！」

ヴァヴァヴァヴァ？（攻撃していいすつか？）

SEEKLE！

第一日『Al e a i a c t a e s t!（賽は投げられた）』（後書き）

次回、暴れます。

恋「いや、暴れられても困るのだが・・・」

作「ヤツはそのために存在するのだからね？仕方がないのさ・・・」

恋「はぁ・・・。まああんまりうるさかったらこいつで・・・ク
スッ」

作「いや、開始第二話で傷害沙汰ですか？それよりなにそのクスッ
って笑いは！」

第二日『Nemo sine vitio est.』（前書き）

えゝタイトルの意味は

『欠点のない人はいない』です。んゝマन्दム！

第二日『Nemo sine vitio est.』

AM7:27 国道666号線 市営バス停 センターズビル前

早朝。

【なっち】に叩き起こされて強制的に押し付けられた仕事（よく考えたらなっちって酷くないか？）を片付けにきたんすが・・・。

こんな化け物が相手なんて聞いてネエズラ。目が黄色い時点でアウトだぜ

なんでこんな仕事をおしつけるかな。

でも自分でやれよとは・・・言えないんだ・・・グスン

・・・まあでも？【恋レン】って言うスngoイらしい人が、成り行きで味方にいるから大丈夫のはずだもんね♪

でも外見が黒髪長髪の色白で華奢の極み・・・。

かわいいの形容詞を軽くイスカンダルまで弾き飛ばすくらいのかわいさ。こいつは信じられませんな。

でも銃持って洋モク吸ってんすよねえ！。バックから普通に出してるし・・・。

しかも銃は銃でもかなり渋目のアンティークリボルバー式。

んーマンドム

結果、外見と中身が合っていない。喋り方もなんかクールだし、関わらないほうが身のため？

「どうしたんだ？」

ああ、あなたのことを少し考えていました。帰っていいですか？・・・なんて言えないよお（女の人には遺伝子レベルで頭が上がんないんす・・・）

「ああ 大丈夫デスよ？」

とりあえず、ね？

でもこの娘さん、爵位レベルの陰気を前にしてこの余裕ぶり。大物のよ・か・ん♪

《ヴヴァアヴァヴ？（なめてんのか？下等な人間が風情が？）》

ああやっぱり怒っちゃうよね。ま〜でも何言ってるかさっぱりでんがな。でも馬鹿にされた感じは感じます。

「おい、そこのおまえ。何と言ってるかわからない。だまっとけこの腐れ・・・が！」

だ、だめっすよ！そんな真面目な口調でスラング（俗語）なんて使

「つちゃ！つてそれよりその顔でそんな汚い言葉をサラリ？ヤアバス！マジで関わり合いにならないほうがいい人？」

「せめて「ザケンナーもどき」ぐらいにしとかなきゃ」

「それは放送コードぎりぎりだろう。」

まあそれもそうだ。

つとー！そのとき悪魔は動いた！

《ヴァヴァー！ヴァアヴ（下等種族がああああこの私を愚弄する気かつ！？）》

いきなり右手を伸ばして一気に間合いをつめるザケンナーもどき。ステップでかわすボク。

と、隣を見れば・・・恋レンいないいい！

「遅い！」

そのまま戦闘を開始する一人と・・・一匹？

「ハッ！なんだこいつは？力自体はバロンレベルだが・・・動きは完全に中級悪魔種だな？」

なんでわかるんすか？

ってそれより動きが早い！もう悪魔の後ろに回り込んでる！制服でその動き可能ナンスカ？

ああああ！なんかメンドクサイ！

1カメラさっくんお願いしマース！

～1カメラ視点モード～

ここからは ごらんのスポンサーの 提供で 御送りしないでもない気がするような・・・。

ナレーターはクイックストラア～イクでギツチョンチョン

・・・嘘です。

悪魔は油断していた。目の前にいるのは二人。それも【人間】だ。

【大罪】から力を得た今の自分なら、【バロン】クラスでも余裕なはずだ。

そう思っていた。そのはずだった。

だがなんだこの女は！そういう顔を消せなかった。

とにかく早かった。悪魔の右手（異常なほどに巨大）を、的確に、なおかつ回り込むようにしてかわす。どんどんかわす。

理解できなかった。自分の右手が女のいた場所につくころには、もう女は左、右へと動いている。

だんだんと悪魔はかわすほうに回っていた。銃を使わせないように、近距離での攻撃を続けることを余儀なくされていた。

なんとか体が付いていくのは、【大罪】から与えられた力のおかげ。動きを少しでも止められたらたぶんあの銃でやられる！！

だが、その力も徐々に減り始めてるのを感じる。体が重い。視界が狭まる。……。

「おいおい自称バロンさん「いや、ザケンナーもど……」うるさい！いいか？まだワタシは自分の力を一回も使っていない。まあ、使わずとも勝てるんだがな！フツ！」

相手をおちよくる恋華。しかしザケンナーもどきに言い返せるだけの余裕はなかった。ああ悲しいかな無力なり

「大方、大罪が噛ませ犬として力を与えていた人形の一つだろ？」

そうつぶやきながら、恋華はついに悪魔をとらえた。悪魔の右手を完全にかわし、なおかつ後ろに回りこみながら下に沈みこむ。

ふりかえった悪魔の右手の動きを、もう完全に読んでいた。そのまま伸びきった右手の中に入り、間合いを封じる。

左手を動かすそれより先に、体をひねって打ち抜く。悪魔の血は緑だった……キモッ！

その間零司は眺めるだけ（いや、手を出すべきではねえズラ？）。

銃を悪魔の顔？に突きつける引き金に力を込める。

「Iurare in verba magistri」

ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ！（くそ！【傲慢】さまは俺を噛ませ犬として使ったのか？この私が死ぬのか？こんな下等種族なんぞに？）

「なんと云つてゐるかは分からんが・・・死ぬ」

ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ（死んで・・・たまるかあああッ！）

悪魔は叫びながら恋華を陰気で吹っ飛ばす。

「最後の力をこんな風に使つていいのか？」

しかし恋華は気づけなかった。悪魔の変化を。

「恋レン！危険だ！なんかその悪魔様子がおかしいよ！」

零司は叫ぶが・・・

「なにが恋レンだ！変な呼び方をするな！」

恋華はもう完全に勝ったと思っていた。その慢心が小さな、ほんの少しのスキを生んでしまった。

「危ない！恋レン後ろ！」

「ん？なにが・・・」

ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ（クロス×たっぷり）

悪魔は今までとは次元の違う動きで恋華に一気に接近する。

「くっな、なんだこの陰気は！さ、避けられな・・・アアアアアアアッ！」

その巨大な右手ではなく、尖った左手で恋華のスキをピンポイントで貫く。

恋華はコンマギリギリでそれをかわすが、その陰圧で弾き飛ばされる。

ヴァ・・・ヴォロオ・・・ヴォロス・・・

もう一度恋華に接近を仕掛けるザケンナーもどき。姿も少しずつ人型に近づいていく。

恋華は【リリース】を握ろうかするが、傷ついた右手は動いてくれない。

悪魔は大罪からの力を全て使っていなかったのだ。というより使う方法が分からなかったのだ。

だが死（消滅）の瀬戸際に立たされたことで、本能的に力を使い出した。しかしそのせいで理性まで力に支配され始めているのだが・・・。

ヴァ・・・ヴォ・・・ヴォロス・・・

その左手（完全にスピアの形）の切っ先を恋華にむけ、間合いを取る。

気を抜けば一気にいかれる距離だ。お互い。

「・・・こんなと・・・ところで？ワタシが？追い込まれてる？」

恋華はスツと目を細め、悪魔を睨みつける。敵の気配を間近に感じる。だが体が動かない。銃を使えない。濃密な殺気感じる・・・。

「調子にのるなよ・・・おまえごときが勝てるんでも？」

恋華は胸のペンダントに手を伸ばす。

【ペンダント】を使えば・・・この状況を一気に消し去れるだろう。

だがもし、発動に失敗したら？今の自分の体力・装備・環境を総合した結果、おそらく50パーセントを切るだろう。

どうする？

あの攻撃をくらっても死にはしないだろうが、確実に致命傷を負ってしまふ。

このとき、恋華の頭の中には、自分と悪魔しかいなかった。

・・・零司、残念戦力外通告！！

どうする？

恋華の頭はひとつに決断できなかった。

その・・・一瞬の恋華らしからぬ迷いは、もう一度敵に隙をみせてしまった。

「恋レン！迷っちゃだめだ！敵がきてる！」

ヴォロスヴォロスヴォロスヴォロス！

戦場では、少しの躊躇が命取りになる・・・。

迫り来るスピアをスローに感じながら、恋華はいつも自分に言い聞かせてきた言葉をまた改めて実感させられた。

これは・・・結構本気でやばいんじゃないのか？ワタシ。

が、恋レンは忘れていたのだ

モーニング娘。の存在を！って違う違う！このボク、零司の存在を！

キイイイイイイイイイイ

目を開いた恋華が見たのは・・・風にはためく黒のロングコートと、

銀の髪。

鞘から日本刀を抜き、左手一本で悪魔を弾き返す零司の姿だった。

「忘れてもらっちゃ困るんす！後は任せとけってね」

につこり爽やか笑顔。クール眼鏡がキラリ。

「今まで、何していた……のだ……。」

まあごもつともなお話ですけど……

「まあいいじゃん！主人公はヒロインのピンチに都合良くタイミングバツチリで現れるもんなんす！」

「だれが……ヒロイン……。」

ああ……つつこめないんすか……

「後から治癒呪文で一揆……じゃなかった一気に治しますからね！一分……いや三十秒だけ待っててくださいな？」

さあ、今から劇【絶体絶命の姫を助ける王子様】がはじまるよおくん！！

三十秒で終わるけどね……ペロリ。唇を湿らせる。

敵に向ける瞳は、30歳のニートも泣いて逃げるような威圧感を秘

めていた。

SEQUENCE!

第二日『Nemo sine vitio est.』（後書き）

やゝ暴れるの、次回になっちゃいましたね。

恋「ワタシは次回までヒマだ」

作「んじゃ、料理の鉄人の調理場レポーターのものまねしようか？」

恋「いや、いい」

作「空気読もうよ！ここで読者をひきつけないと・・・」

零「えゝフクイさん！鉄人があ、ツバメの巣を取り出しまし・・・」

作「おれのネタじゃあああ！」

恋「うるさいな。だれがしようと勝手だろ」

作「やいやいやいやいや！今読者さんを全部零司にもってかれた・・・」

・「また次回あいましょう（ね〜）」っておい！聞けY.O.なんつって！」

第三日『E c c e h o m o ! (その人を見よ!)』 (前書き)

30秒・・・そんだけあれば私、コーラ一気飲みできます。

第三日『E c c e h o m o ! (その人を見よ!)』

敵を射抜くような眼をしながら敵に問いてみる。

「三十秒で終わらせなきゃなんないんだ……。ごめん。赦しを請うなら今のうちだよ?」

殺さなくていいならそれが一番。たとえ甘いと言われようとも、こればかりは譲れないんだよね。

ヴォ……。ヴォロヴォス……

……。

「無理だろう。もう根まで侵されている……。」

やるしかない……。な。恋レンみたいな美少女に傷つけたことは、赦されないことだしね。

「せめて我が力で終わらせる?それが慈悲ってもんだらう?」

ボクは刀に手をかける……。

静かに殺気を体になじませる。

敵が間合いを少しずつ詰める。でえゝも無問題ゝ」。

「アチシがここの間合いを支配した・・・ってかあ？」

敵が一気にその巨大な手を伸ばす。

だがよける必要はない。なぜならそこにボクはいないから。

ヴォ・・・ロ・・・ス？

「君の目は節穴かなゝココにいるよん！」

決して動きが速いわけではない。ただ、相手の先を読みながら間合いを把握。

それからルートを構築し、無駄を極限まで削った動きでたどっているだけだ。

間合いと見切りをマスターすれば、これくらいは意外とできるもの。

左をかわし、右の手を読む。

スピアは速いが、どうしても突き中心。ぎりぎりまでひきつけて、

少しの重心移動で流していく。

右手なんてただデカイだけだし……。力の一点集中で弾き返す。

ヴァヴァヴァヴァー！！

本能にまかせた攻撃なら、気配で動きが読めるもの。作戦のない攻撃ほど愚かな物はない……。

背後に回り、さらに横に動き、また前に戻る。

そのままがら空きの胸にもぐりこみ、刀をつきつけながらつぶやく。

「Acta est fabula, plaudite!」(芝居は終わった。喝采せよ)「

悪魔の胸に刀を突き刺す。苦しまないように【霊核】を一気に壊す。

【霊核(人間でいう心臓)】を全て壊せば具現体は消える……。この世界の【ロジック】のひとつだ。

悪魔はクワツと目を見開き、咆哮したかと思うと……

まず足、それから右手……。と、灰になりながら消滅した。

そつと眼を閉じ、黙祷。今日も無事におわりました・・・。

つと！切り替え切り替え！お祈りなんて5秒で十分！

決してあの悪魔が弱いわけではないとは思っただけど、そんなことはボクの知る由もねえってことナンス

さつて、時間は手元の時計によると・・・んゝ23秒ちよいか！イエア！

はやく恋レンを治癒しにいかなきゃ。

白い灰の舞う中、ボクは恋レンのほうに顔をむけた・・・。

カサツ・・・カサカサツ

「後ろっ！」

ん？

バキューーッ

右手をかばいながら無理やり銃の引き金をひく恋レン。

後ろを見ると・・・悪魔の左手の切っ先が、寸前で止まっていた。

・・・なんという執念・・・。

怖っ！

「あ、ありがと三角・・・」

「ワタシだって、これくらいは造作もなかったのだ。別に助けてもらわなくとも余裕」あゝはいはい。わかったから。」む、む・・・」

~~~~~  
~~~~~ ヒーリングだ オウイエィ~~~~~  
~~~~~

「この結晶に秘められし力よ、我が力のもと、発動せよ！ん」『兵』  
「」

フアフアフアフアアアア♪

手に握ったクリスタルから、膨大な陽気が溢れ、ワタシを包む。傷

も疲れも一気に治ってしまった。

「すごいな……。その治癒結晶は、【大天使】クラスの者が力を込めたものであろう?」

まあそれをあんなに簡単に発動させるヤツも奴だが……

「あの、それよりすいません……。なんか巻き込んだみたいで……。」

肩を日本海溝のごとく落としてあやまってくる零司。

「いや、ワタシが勝手にやったことだ。気にされると逆に困ってしまっ」

ほんとにそうだ。勝手に入って勝手にやられただけだ。

退魔業において、最も重要なものは霊力でも武器でも技術でもなく、事前の準備。

より多くの情報、それに合わせた作戦と装備に、伴う様々な危険性においての対抗策。

分かっていたはずなのだが……。なぜか彼のことが放っておけなかった。それはやっぱり……

「なぜ君はそんなに力を持っているのに、あの程度の敵を目の前にしてあそこまで警戒していたのだ？」

そう。彼は警戒・・・というより怯えていたのだ。

敵が現れた瞬間に怯えるなんてのは、はっきりいってこの仕事にはゼツタイに向かないだろう。

「・・・じつはボクね、霊力を感じることができないんすよ。生まれつきね」

はあ？それって・・・

「その状態で退魔なんて！いくら力を持っていたとしても、死に行くようなものじゃないか！キミはバカか？」

退魔において、霊力がないっていうのは生肉を持ってサメと追いかけてこするようなものだと思ってほしい。

「いや、だから死なないように技を磨いたわけで・・・それに退魔って、二人一組で行うのが多いじゃないですか？だからいっつも大丈夫だなあっと・・・」

「なら何で今回は一人だったんだ？」

「いや、情報によると、中級悪魔クラスだって聞いたもんで・・・」

「はあ・・・。なるほどな。だからあの外見を見て・・・」

「ビビりまくった訳なんよね・・・。」

そうか・・・。

「まあ、ワタシがとやかく言うことではないがな・・・。」

立ち上がりながら、つぶやく。

「ならば、ワタシは帰らせてもらおう。その・・・なんだ。今日とは・り・あ・え・ず、助かった。」

「ちよつ、ちよつとまって！その格好で行くん？」

下を見ると・・・制服はぼろぼろになっていた。ってか汚れすぎだろっ！？いつこんなに汚した？なんか作者の悪意をひしひしと感じるぞ？

「ん？まあどうにかなるだろう？」

まあ格好には正直そこまで気を払っていない。ただ友人がうるさいからしているだけで・・・。

「だめだよお！そんな格好なんて！ガッコでしょ？今から」

「まあ・・・そうだが・・・」

そりゃ平日の朝から制服きてバス停までジョギング・・・なんてのはありえんだろっし。

「なら、なおさら！こんなことになっちゃったのは、ボクのせいでもあるんだし・・・。」

「別にかまわん」

服なんて、ジャージでも着とけば大丈夫だろ？

「そういつわけにはいかないよぉ！んつと・・・そうだ！」

そう言つて、零司はポンツと手を打つ。いやな予感がする・・・が

「うち近くなんだ！来ない？来なよ、いいでしょぉ？」

そう言いながら、答えを聞かないつて雰囲気で首をかしげる。そんなクールな顔をいっぱいの笑顔でかしげられても・・・。

「いや、その・・・なんだ、学校が・・・」

「だから！その学校に行けるような状態じゃないでしょ？！もう！意地っ張りなんだから！」

「いや、意地とかそんなんじゃない・・・ちょ！手を引つ張るな！犯罪行為になつてゑぞ！」

「んもう！恋レンくらい強かったら、むしろ逆に犯罪？みたいなの？」

「いや意味わからん」

そういうやりとりをしながら・・・結局着いたのは、商店街から一歩小道に入ったところにあるなかなか洒落た喫茶店と、細い道をはさんでまん前にある本屋だった。

その喫茶店は、どこかイタリアを感じさせる明るくゆったりとした場所だった。

名前は・・・

「ここがボクたちの家。【初夏凜凜】と、【ぶつくす】だよ」

だそうだ。【初夏凜凜】はわかるが、【ぶつくす】ってなんだよ・

ワタシがそうちつとばかり安直すぎやしねえか？と頭をひねっていると、零司はそのまま喫茶店に入ってしまった。

「ただいま」

「あら〜んおかえり〜」

・・・ちよつとまで。なんだあのあきらかに男なのに女口調の声は！  
いやーな予感がするぞ？

このまま帰ったほうが・・・

「恋レン！はやくはいんなよー！」

ちょ！おまえ！

「ひっばるな！」

「だってなんか入りたくなさそうだから・・・あ？なに？やっぱり服気にしてる？」

「そんなものは始めから気にしていない！っていつかこの格好で朝の商店街を賑わせたんだからいまさら気にするも何もないだろうが！」

「なら入んなよ！ほらほらほら」

いや！あの男の声が耳に残って！

ギイイイッ

「つれてきたよ！」

「あらあん？その「な」の？」

ああ  
・  
・  
・  
入ってしまった  
・  
・  
・

【S E Q U E N C E】

第三日『Eccce homo!（その人を見よ!）』（後書き）

次回、新キャラぞくぞく？

零「うん。ボクの仲間？がいつぱいくるよ!」

恋「はあゝ。なんだかイヤな予感しかしないぞ?」

作「新キャラは濃いよゝ!キミ達消えちゃうかもね・・」

零「いや、それは・・・」

恋「んゝまず消えるのはキサマだろうがな。」

作「ひどっ!」

九「そうよゝ作者は私たちにとってかみなんだから」

四「そうそう!だあかあらあゝわたしになんかキャワイイ男の子のフラグ立ててゝん」

恋「いったい誰なのだ?おまえたちは!」

零「あわわわ!勝手に出てきちゃまずいよお!」

八「大丈夫ネ!ココはワタシにマカセルネ!ワタシのカイハツしたこのx-1098をツカエば、ニンゲンの中枢神経にサヨウして前頭葉に・・・」

零「余計にまずいでしょ!なにそのカタカナの中にところどころ混じる漢字は!」

恋「やっぱり・・・」

五「不安だね」

恋「だれ!?!?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1110d/>

---

非日常的な日常

2010年11月12日19時21分発行